

# 和紙 だより

越前和紙への提言



■前田一樹 (和紀)

(株) 前田デザインアソシエーツ代表取締役社長を経て平成13年より国立高岡短期大学産業デザイン学科教授。パッケージ・グラフィックデザイン、国内外の伝統産業のプロデュースを手掛ける。近年因州和紙のプロデュースに関わっている。

■前田一樹 (和紀) さん  
(グラフィックデザイナー)  
「一枚の和紙の価値を上げるには」

●和紙との出会い

もう三十年ほど前になるでしょうか。京都に和紙の魅力的なショールームがオープンしたと伺いました。そのご指導は、当時京都工芸繊維大学の教授で版画家の黒崎彰先生でした。越前今立の和紙の里と学生を結び、本物を学ばせ、実験的なデザインを考えてみるというような授業をされていた方です。京都の北山辺りにあったその「紙屋院」と呼ばれる店は、若いエネルギーの結実を教育から、実社会へ繋ぐ現在の産学協同とも言える、素晴らしい試みでした。

当時私は、和に関するデザイン、プロデュースが多く、販売戦略・商品開発、店舗デザインなどが主でした。ある時クライアントの一家が東京の大丸デパートに出店することが決まり、壁面を和紙で空演ししようとして企画しました。そこから越前和紙との出会いが始まったのです。そのお店の空間は、岩野平三郎さんの瀧き場をお借りして7尺×9尺の大きな和紙を漉き、照明との組み合わせで、柔らかな空間の演出をしました。当時は大きな和紙は余り馴染みがなく商空間に使われるのも珍しいことでした。和菓子その他に和の文化も合わせて売りたいと考え、和紙の包装紙や紙紐、水引もギフトラッピングとして提案し、その素材を売った

ら面白いのではないかと、進物用にオリジナルなデザインをしてみたら・・・とアイデアは広がったものです。



コンクリートと和紙の組み合わせをいかした住宅

●堀木エリ子さんとの出会い

「紙屋院」という名の店は今はありませんが、その会社のスタッフであった女性が、和紙に並々ならぬ興味を持ち和紙の仕事が続けたいと話しているので、一度相談に乗って欲しいとデザイナーの大先輩から頼まれました。その女性が、今や国際的な和紙作家である堀木エリ子さんだったのです。

その後、デザイン企画の顧問として堀木さんと組むことになり、京都の企業家の後立てを受け「シムス」(紙結)というブランドを立ち上げました。経営の方向性を出すにあたり、大型の和紙であっても所詮、一枚の紙に高額を出しても使っていただけの人を継続して多く見込むことは難しく、本当に良い物、価値ある物であっても、それだけではブランド経営としては成立しないと考えました。しかし現代の生活世界における日本の和紙と人との関係性に、私は新しい世界を確信し、この価値を知ってもらうには、新た

な紙の可能性を実際に見て、理解して頂くしかないだろう、だとしたら、その様な紙を表現できる場合は建築しかないという結論を持ちました。シムスが建築の分野に入るには、まず建築家と話ができる知識やセンスなどの共通言語、そして難しい要望にも応えうる紙以外の様々なノウハウを知ることが必要です。そこで建築家とコミュニケーションの取れるように建築の勉強が必要だとアドバイスしました。紙そのもののデザインも、従来の視座からものを見るのではなく、和紙の新たな可能性を追求し、それらを具現化した実在感のあるクリエイティブさを表現しなければいけないと思い、一枚一枚の作品に常に挑戦の結果が見える試みを続けました。

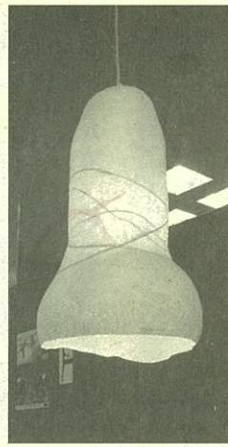
●一枚の和紙の価値を上げるには

一枚の紙の価値を上げていくには、一度今までの技法をゼロに戻して、素材開発、道具開発に挑戦してみることが必要だと私は考えています。

素材開発の面では、紙を漉くというより、繊維や繊維の構造そのものを作っていくという発想です。ある時、紙は基本的には不透明で、薄くすることによって透けるけれど、透明の和紙を作れないかと考えたのです。透明の自然素材ってなんだろう、ふと思いついたのが昔トースターに使っていた透明の雲母でした。早速、鉱物としての雲母を輸入しておられる企業を訪れると、雲母は自動車のマイカ塗



装や化粧品、口紅やファンデーションなどの光る素材に使われていることが分かり、それ以上にダイヤモンド以外の宝石は雲母の鉱脈から出来ることも知りました。ですから雲母は、とても厳しく監視されている素材でもあったのです。また江戸時代から「雲英きら」といつて雲母を使い、光る紙を創るために使っていたのは知っていました。驚いたのは加賀前田利家公の「兼六園にある茶室」に、私が創ろうとしていた透明の紙が、すでに明かりを茶室に取り込むために使われ、まさしく透明の紙を先達は完成させていたのを知りました。



立体的に透かれたランプシェード

道具の開発は、例えば「紙は平らである必要があるのか?」、「紙は水と切り離せないのなら、水の属性を存分に活かすとどういう現象が考えられるのか?」、「水にまつわる道具が作る表情を定着出来ないものか?」など、いろいろな方法論が浮かんできました。そしてプロセスである原料作りの段階から記号論的に捉えたときの、漉くという行為とは何か、その行為に、動詞を加えることから何が生まれるのか? これらのシンタクスの思考段階からセマンティクス、プラグマティクスへの思考の繰り返しですが新たな和紙の価値を生み出していったと考えます。

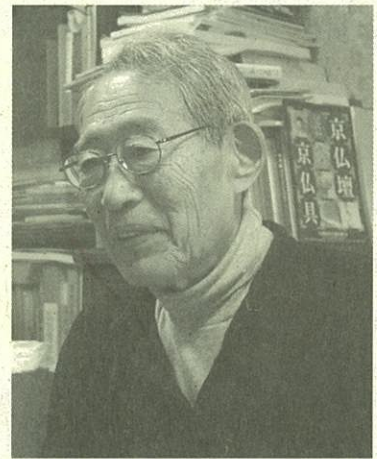
●因州和紙の青年部の方達と

全国手すき和紙連合会の鳥取大会の折、基調講演を依頼され因州和紙の産地に赴きました。講演だけで私の考え方はきつと伝わらないと思い、見方、考え方を交えるための「体感できる紙布」を地元染色家とコラボレーションし制作しました。また新たな挑戦を産地に始動させるきっかけ作りの為、和紙の専門家十プロデューサー「遊びの実験和紙」勉強会十展覧会を計画。青年部有志の人たちと和紙のデザインワークショップを始めたのです。何回かのプログラムを考え、毎回ひとつのテーマで宿題を出してきました。例えば、「紙で直径十ミリ、長さ五十センチのパイプを次回までに作ってきてください」というような課題を出すのです。楽しみながら苦笑しながら、私としてはその先の素材開発や道具開発も射程に入れている企画でした。

このような技術開発と共に、産地には、それらの企画を経営的に成立させていくためのマネージメントや、理解するセンスや、人材が必要です。新しい販売チャネルや用途を開拓することが重要だと思っています。因州和紙は流通の面でも技術の面でも、新しい和紙世界への挑戦を続ける事を忘れず、本物の和紙のみが持つ価値を絶やさない努力を継承されていると思います。私は広く世界が求めているものが日本の伝統工芸の中にあり、世界市場に向け、海外の動向を見続けるようにと指導しています。

漉き場探訪

■岩野平三郎さん  
(株) 岩野平三郎製紙所



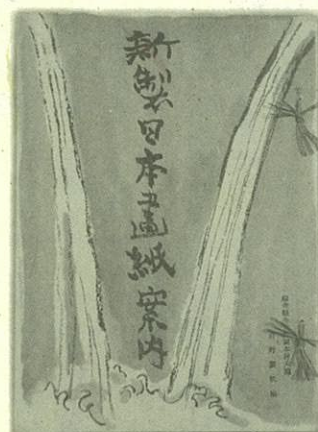
岩野平三郎さん

手漉き工場としては従業員四十六人の日本一の規模。国内外の芸術家に広く使われている日本画用紙を製造。福井県指定無形文化財技術保持者。若手職人、作家育成にも尽力している。漉き場は岡本川の上流に沿った、大滝の町半ばに昔ながらの風情を残してあり、中には大小様々の漉き舟が並んでいる。

●名だたる画家が愛した和紙

現在の岩野平三郎さんは三代目。先々代は「近代日本画を変えた和紙職人」として和紙の歴史に名を残す。明治時代には絵絹に描かれていた日本画は、大正・昭和期、先々代の漉き紙とその評判によって、和紙に描かれることが主流となる。厚みのある柔らかな紙は絵の具の厚塗り可能にし、特別に漉かれる大きな紙は大作を可能にした。又、その丈夫さは年月を経ても絵の風格を失わせない画家達の愛する紙だった。いわば平三郎の紙は、当時の日本画の巨匠達の表現の幅を広げ

た和紙だったのである。この紙を愛した画家は、横山大観、竹内栖鳳、川合玉堂、富田溪仙、小杉放庵、下村観山、近年では東山魁夷、平山郁夫、千住博などそうそうたる顔ぶれである。



大正14年制作「日本画紙案内」

●お客とのきめ細やかなやりとりからここに大正十四年に祖父が作った日本画紙の宣伝本「日本画紙案内」があります。それを読むと技法や歴史も大切にされた人だったことが伺えます。祖父は実に研究熱心な人で、絵描きさんとの交流からどんな紙が望まれているかを的確に汲み取って、特注の紙を提供していました。こういった画家とのやりとりの手紙が家には五百通も残されていますが、それを読みますと、「この間の紙は、筆の入りがいい」「先日の麻紙のお陰でいい絵が描けた」「にじみ具合がいい」などと賞賛をいただく一方、祖父の方でも「乾燥する面があれば、どんな紙でも漉いてみせる」という気概も見せておられます。様々な紙の復刻にも尽力し、「打雲」「雲華紙」「東風紙」「すみれ紙」「雲龍紙」などは模様紙の原点ともいえるものです。絵描きさんの要望に応えているような日本



画用紙を漉きましたので、それらは画家の名前を採って、大観紙、栖鳳紙などと呼ばれました。



作業場の様子（紙漉場）

●特注の大きな和紙

日本画の絵描きさんは、襖絵や屏風といった大作を手掛けますので、特注で大きな紙が漉けるのも、ここの特徴でしょう。平山郁夫画伯が、薬師寺の襖絵を描くときも、寸法が縦九尺（約二・七m）横十二尺五寸（三・八m）の特大紙を所望されました。紙は雲肌麻紙で、そちらの方は問題なかったのですが、何しろ大きな紙なので、七尺九尺をつないでは・・と勧めましたが、継ぎ目が気になって描きづらいとおっしゃるので、さて、そんな大きな紙を漉くのは初めてで、どうしたものかと思いました。結局、その紙のために工場を新設することになってしまいました。問題は最終工程で紙の乾燥に使う張り板（干し板）でした。普通は表面に木目がなく、つるつるの表面のイチヨウの木を使いますが、そんな大きな板にも福井の材木問屋さんから、たまたま大きなイチヨウの板が出たと連絡を受け、やっとできると確信したのです。出来上

がった絵は、大きな紙の上に顔料の重さが加わりますから、紙5kg.だった重さが何と40kg.になったそうです。

●日本画紙はほぼ独占状態

現在ここで漉いているのは、日本画用画紙、襖紙、版画用紙などで、日本画用は大体三分の一でしたが、最近少し増えているようです。というのは、高齢化社会で、仕事を引退して手習いに日本画や習字を始める年輩の方が増えているのか、趣味の分野の需要は増えているようでして、襖が落ち込んだ分、それでだいぶ助かっています。画家達のお弟子さんや芸大の日本画の学生さん達も愛用していただいているようです。千住博さんも学生時代にここへ来たとおっしゃっていました。東京芸大、京都市芸大、武蔵美、多摩美、金沢美大などの日本画家の卵が、この漉き場に見学に見えます。あとは、美術印刷用の印刷用紙も、今では高度な複製印刷ができますので、博物館や文化財の復刻用や保存用などにも使っています。

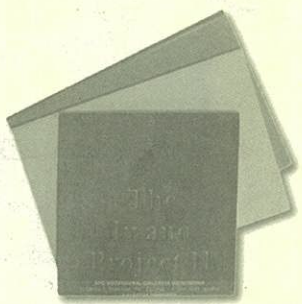


作業場の様子（乾燥、検品）

●芸術家を紙で応援

芸術家とのおつきあいが多く、いろいろな展覧会や文化交流などにも協力して

いますし、海外からも造形作家や版画家の方がしばしばお見えになります。不思議なもので、おみやげに一番いい紙をあげるから、選んでご覧なさいというところ、こういう方達はちゃんと一番いい紙を見分けるのです。その点日本人の方が、見分けられずよく和紙のことが解っていないなあと感じます。和紙のちよつとした繊維も風合いであるはずなのに、ゴミだと思ってしまうようです。この点は私たちもつとそうではなく、手漉きの紙というものはこうであるということを引きちんと知らしめるべきかもしれません。丹誠込めて手のかかった紙に不良品として丸印など書き込まれて返品されたりすると、残念でなりません。



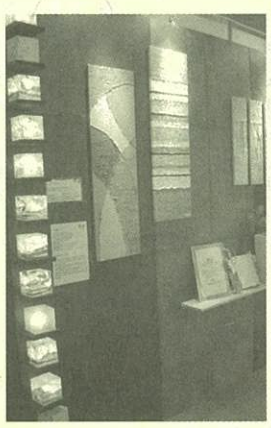
「岩野プロジェクト」パンフレット

ユーゴスラビアのこの紙の展覧会には、「岩野プロジェクト」と称して、向こうの芸術家に毎年、和紙を百枚ほど寄付しています。あちらの芸術家は、経済的にも恵まれているわけではなく、彼らにとって高い本物の和紙を提供してもらうのはとても嬉しいそうです。越前の紙を国際的に知ってもらう意味でも、これからできることは協力していこうと思っています。

■イベントレポート

インテリアトレンドショー  
2004東京国際家具見本市  
会場 東京ビックサイト

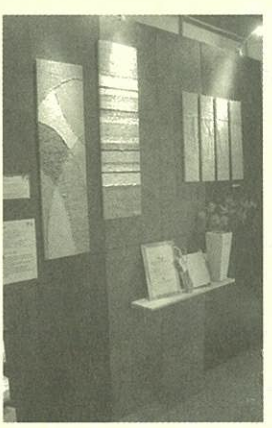
二〇〇四年十一月二十二日〜二十五日、東京ビックサイトにおいて、国内外のインテリア材料、家具の展示会が開催された。テーマは「日本の暮らしのリモデリング」。出展企業約九〇〇社、のべ来場数二万八千名となっている。住宅や店舗の設計者やデザイナーなどの来場が多い。



店舗向け和紙の提案

●和紙の良さを住宅や店舗に提案

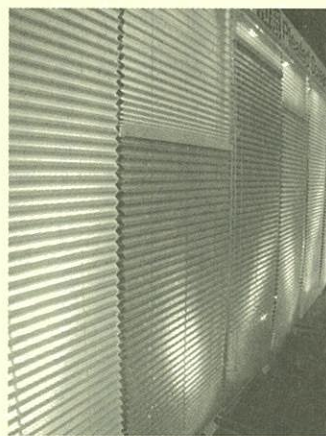
店舗向けの和紙の提案では、メンテナンスに配慮した加工を行っている所もあった。濃い色合いが多く、他の繊維をすき込んだ荒いテクスチャーのものも多い。



店舗向け和紙の提案



また、住宅向け和紙としては防汚加工を施した上にプリント加工をし、折りたたみ式のスクリーンにしている美濃の和紙メーカーもあつた。



プリント加工を施した和紙スクリーン

大手メーカーも住宅向けに和風テイストの商品を展示していた。全般に落ち着いた色合いで、素材の質感と、自然素材ならではの機能性を訴えていた。



和風素材の展示コーナー

●産地が協力して商品開発

和紙以外でも地場産業が、他の専門家と組んだ新規開拓事業も多く見られた。信楽焼きの窯元の組合、販売の組合、町が協力して「現代の空間に似合う陶」というコンセプトで、ブランドを立ち上げ、積極的に商品開発を行っていた。



信楽焼ブランドの展示コーナー

また、enn STYLEという四国の家具業者の共同ブランドでは、東京の建築家やデザイナーと協力して商品開発を進めている。テストマーケティングを何度も行い、商品の改良を何年も繰り返した。また「作りやすい」「デザインが良い」だけではなく、いかに販売に結びつけるかを苦勞して考えている。その甲斐あつて、東京の大手インテリアショップや通販カタログにも採り上げられ順調な滑り出しを見せているとのこと。



enn STYLEカタログ

●まとめ

どのメーカーも産地も、単に新しいものを展示しているだけではなく、いかに商売として成立するかを挑戦している。ブランドを育てるには絶え間ない努力が必要なのだ実感した。

情報欄

● イベント情報

■ 工芸品展 in しなの

時：2005年3月19日～9月25日

場所：品野陶磁器センター（愛知県瀬戸市）

■ 「春から使おう」伝統工芸入門展

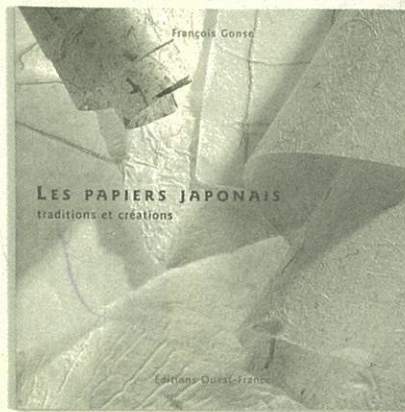
時：2005年3月24日～4月5日

場所：全国伝統的工芸品センター（東京 池袋）

■ 神と紙の郷 春祭り 越前和紙 大掘出し市

時：2005年5月3日～5月5日

場所：和紙の里通り（福井県今立町）



■ フランソワ・ゴンス氏の本ができました。

「和紙だより」2004年夏号で紹介したフランスのフランソワ・ゴンス氏の著書「パピエ・ジャポネ」が出版されました。大手洋書店などで取り扱っています。

素の紙展

時：2005年3月30日～4月18日

場所：卯立の工芸館（福井県今立町）

全国有数の和紙の産地越前から、現代的な空間に活かしていただきたいモダンな素材としての越前和紙をご覧に入れます。長い伝統に培われた確かな技術に裏打ちされた当地の和紙工房を、今回の展示会のために特別にコーディネートしました。

編集後記

3月30日から始まる「素の紙展」の開催準備に、いくつかの漉き場を回りました。いろんな技法に目を見張ることもしばしば。今回の展示は「キックオフ」イベントといって新たな取組に入るきっかけの催しということになります。多くの方にご覧いただけるよう、周りの方にお知らせ下さい。（よ）

季刊・和紙だより 第6号（2005年春号）発行日：2005年3月20日

※無断での転写・転載はお断りいたします。

発行人：福井県和紙工業協同組合 長田昌久 住所：福井県今立郡今立町大滝11-11 TEL：0778-43-0875 FAX：0778-43-1142

編集人：右衛門佐美佐子事務所 右衛門佐美佐子・北條崇 編集所：〒606-8225 京都市左京区田中門前町90 TEL：075-702-6548 FAX：075-702-6223